2020 年度

WAVOC 主催オンラインセミナー

「コロナ禍を生きる社会問題、コロナ禍でやるボランティア」

第 2 回「越境するブータン人」

ゲスト・モデレータのご紹介

ゲストスピーカー：津川智明さん（元 JICA 専門家／日本ブータン友好協会副会長））
ブータンには 1983 年に国連ボランティアとして初めて赴任。以来、JICA 個別専門家としてデオタンの専門学校にて土木を指導。1991 年から 3 年間、青年海外協力隊調整員として首都ティンプーにて勤務。2004 年からは内務文化省地方行政局をカウンターパートに、JICA 地方行政支援プロジェクトに携わる。

モデレーター：平山雄大（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター講師）
ブータン近代学校教育史を研究する傍ら、海外実習科目やスタディツアーの引率、ガイドブックの編集等にも従事。WAVOC では、「海士（あま）ブータンプロジェクト」にて、島根県隠岐郡海士町とブータンを舞台にした学生ボランティア活動をサポートしている。また、日本ブータン研究所の諸活動を通して、学際的な相互向上の場の創出及び関係者間のネットワークの確立を図っている。

WAVOC 主催オンラインセミナー
「コロナ禍を生きる社会問題、コロナ禍でやるボランティア」
第 2 回「越境するブータン人」

2020 年 10 月 10 日（土） 13:00–14:30
平山雄大

報告（文字起こし）

平山：皆さま、本日はお忙しいところ、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）主催オンラインセミナー「コロナ禍を生きる社会問題、コロナ禍でやるボランティア」第 2 回にご参加くださり誠にありがとうございます。本日のモデレーターを務めさせていただきます、WAVOC の平山です。どうぞよろしくお願いします。

ざっと見た感じ、ブータンの諸相に精通されていらっしゃる方々が多数参加してくださっています。ブータンに行ったことがある、もしくはブータンで働かれていたことがあるというかたがかなりいらっしゃるのではないでしょうか。一方で、ブータンには詳しくないけれども、内容に興味があって参加してくださった、というかたもたくさんいらっしゃると思います。非常に多くの方々にご参加いただき大変嬉しく思っております。どうもありがとうございます。セミナー前半では、ブータンについて詳しくないかたも多いという前提で、国の概要等についても少し紹介させていただきます。

① セミナー概要・ゲスト紹介
② ブータン概要・コロナ禍の状況
③ ゲストにお話を伺いつつ、深める

本オンラインセミナーは、このように 3 つのセッションから構成されています。まず私のほうからセミナーの概要とゲストの紹介をさせていただき、続いてブータンについて、またこれまでのブータンでのコロナ事情について概観させていただきます。その後、本日のゲストである津川智明さんにお話を伺いながらテーマを深めてみたいと考えています。残った時間は質疑応答・意見交換の時間に充てたいと思います。

① セミナー概要・ゲスト紹介

平山：それでは、最初のセッションに入っていきます。

WAVOC 主催オンラインセミナーは、全 4 回のシリーズです。このコロナ禍の中で変化する社会問題、またそれを取り巻く状況を見つめ直し、どのような支援やボランティア活動を行うことができるのかをゲストのかたと一緒に模索してみよう、という企画です。WAVOC に所属する教員が 1 回ずつ担当しており、本日は第 2 回、テーマは「越境するブータン人」です。

コロナ禍の中で、今、国境が再びその存在感を増しています。国境が閉鎖され、また移動が制限される中で多くの問題が生まれていますが、特に越境を前提とする人々の生活は困難に直面しています。このような状況を、本日は私が研究調査・教育活動で関わってい

るブータンに焦点を当てて追ってみたいと思います。

- コロナ禍でのブータンの状況（2020 年 3～10 月）を知る。
- 越境するブータン人（国外から帰国したブータン人／インドとの国境を行き来していたブータン人）の状況を知る。
- コロナ禍でのブータンの社会・人々の変化について知る。
- ブータンでのボランティア活動について知る。
- 新しいボランティアのかたちについて考える。

本日のセミナーの目指すところはこの 5 つです。

まず、今年 3 月から現在にいたるまでのコロナ禍でのブータンの状況を知ることです。次に、越境するブータン人の状況を知ることです。ブータンは閉鎖的なイメージもありますが、実際は隣接する国・地域をはじめ、世界との往来はかなりあります。本オンラインセミナーでは特に、コロナ禍の中で国外から帰国したブータン人と、インドとの国境を行き来して生活していたけれども、それができなくなったブータン人に焦点を当てます。次に、コロナ禍でのブータンの社会・人々の変化について知ることです。実際どのような変化が起きているのでしょうか。そして、ブータンでのボランティア活動について知ること、新しいボランティアのかたちについて考えること、です。

ゲストは、JICA 専門家等として長年ブータンに寄り添い、お仕事をされてきた津川智明さんです。私もいつもお世話になっておりますが、そのお心の温かさに惹かれ、津川さんを慕う人は非常にたくさんいます。「ミスター・ツガワの言うことだったら間違いない」という言葉をブータンの多くの方々から聞きますが、ブータンで最も信頼されている日本人のひとり、と言って過言ではないでしょう。津川さん、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

② ブータン概要・コロナ禍の状況

平山：それでは、ブータンについて、またこれまでのブータンでのコロナ事情についてみていきます。おそらくスライドに記したことすべてには触れられないので、特に詳しく追われたいかたは、お時間よろしいときに細部までご確認いただければと思います。スライドのデータをチャットで皆さまに共有しておきます。

皆さま、「ブータン」と言われて何を想像されるでしょうか。多くのかたは、ここに挙げた中のどれか、もしくは複数を思い描かれたのではないでしょうか。学生に聞くと特に多いのは「料理が辛い」、「幸せの国」、「イケメン国王」等で、少し詳しい学生からは「チベット仏教」、「旅行がしづらい」、「民族衣装を着ている」、「GNH（Gross National Happiness、国民総幸福）を掲げている」、「最近はドラッグが問題になっている」といった答えも出てきます。中には、私が担当している海外実習科目「ブータンから学ぶ国家開発と異文化理解」やボランティアプロジェクト「海士（あま）ブータンプロジェクト」を挙げてくれる学生もいます。スライドの写真は、ブータンを表す象徴的な風景の一部です。一般的にイメージされるブータンは、だいたいこのような感じではないでしょうか。

出所）筆者撮影

まず押さえておきたいのは、ブータンは中国とインドという、人口 10 億人オーバーの超巨大国家に挟まれた小国だということです。面積は九州くらい、人口は島根県と同じくらいです。最新の 2017 年の国勢調査では、調査日当日にブータンに住んでいた約 72 万 7,000 人のうち、約 4 万 5,000 人（全体の約 6%）がブータン国籍未保有者でした。その大部分がインド人の労働者とされています。チベット仏教徒が全体の 4 分の 3 くらい、ヒンドゥー教徒が 4 分の 1 くらいで、少数ながらキリスト教徒等もいます。ブータン王国憲法では、多方面に配慮して、チベット仏教を国教ではなく「精神的遺産（spiritual heritage）」と位置づけています。ただ、実質的にはチベット仏教カギュ派の宗派のひとつであるドゥク派が国教の位置にあると言えます。また、国王主導の民主化が行われ、2008 年からは立憲君主制となっています。

ブータンは多言語国家で、国内では 20 ほどの言語が話されています。2015 年の調査によると、国語のゾンカ語であっても母語話者は 21%ほどにすぎず、なかなか複雑な言語状況を有しています。学校教育の教授言語は英語ですが、国語の時間はゾンカ語を教授言語にゾンカ語が教えられています。たいていのブータン人は、話すのと聞くのであればヒンディー語やネパール語もできます。

ブータンには 20 の県がありますが、旅行先等でよく名前が出てくるのは、国際空港があるパロ、首都があるティンプー、及びその先のプナカやワンデュ・ポダン、いわゆる西部です。本日のスライドでは、それらに加え南部のサムツェ、サルパン、サムドゥプ・ジョンカルといった県、特にプンツォリンというインドとの国境の町と、国境を挟んでインド側に位置するジャイガオンという町の名前が出てきます。この南部地域は標高が低く、ブ

ータンの中では例外的に夏はかなり暑くなり、マラリアが流行ったりもする一帯です。

かつてブータンの近隣にはシッキム王国をはじめとしたチベット仏教の国がいくつかありましたが、今は国としては存続していません。ブータンは小国の生き残りをかけて、特に 1980 年代からは意識的に、公の場での民族衣装着用義務等を通して、また「環境保護国家」や「生物多様性の宝庫」といったイメージづくりを通して国のブランディング、及びアイデンティティの確立をはかってきました。

そうした中で、GNH という前国王（第 4 代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュク）が提唱された開発哲学が国づくりの根幹に位置付けられました。現在進行形で、国民の幸福の最大化に重点を置いた国づくりが展開されています。今から 16 年くらい前には、「GNH の 4 本の柱」（持続可能で公正な社会経済開発、環境の保全、文化の保護と振興、良い統治）というものが確立しました。政府の開発の方向性がそこに凝縮されています。

一方で、多くの国と同様に地域を巡る問題や失業率の上昇等、近代化にともなって生まれてきた新たな問題もたくさん抱えています。近年はそうした点が注目されることも増えています。ポイントを羅列するとこのような感じでしょうか。

- 中国とインドという二大国に挟まれた小国
- 国の独自性の模索
- 「国民の幸福の最大化」を目指す国づくり

⇒ 「幸せ」をキーワードに注目を集める！一方で、近代化に伴う問題も数多く内包

出所）https://twitter.com/thebhutanese/status/1235766569436839937/

ブータンでは、今から約 7 ヵ月前の 3 月 5 日の夜に、初めて国内でコロナ陽性者が確認されました。発症したのは 76 歳のアメリカ人旅行者で、翌 6 日には、彼が訪れたティンプー、パロ、プナカ県の学校やオフィスの閉鎖、外国人観光客の受入停止等が発表されました。また写真にある通り、町の薬屋さんにはマスク等を求める人が殺到しました。ブータンの現首相は医師で、保健大臣も公衆衛生の専門家です。さらに外務大臣も医師で、政府は特にこの 3 人が中心となってコロナ禍の政策を遂行していくことになります。

3 月 13 日、インドとの陸路往来の最大拠点であるプンツォリン・ゲートが一時閉鎖されるという騒ぎがありました。これは後の本当の国境閉鎖の前段階で、国境地域の混乱状況を示したニュースでした。そして 16 日以降、事態は一気に動きます。まず、ブータンに入国する際（つまり、留学生をはじめとした国外にいたブータン人等が帰国した際）は 14 日間の隔離が義務付けられました（これは同月中に 21 日間に延長されました）。また、学校閉鎖は 3 つの県から全国 20 県に拡大しました。

実はプンツォリンと国境を挟んだインド側の町ジャイガオンには、多くのブータン人が住んでいました。それは、ブータン側よりも家賃が安いし物件も多いから、さらに物価も安いからで、多くの人は毎日国境を越えてブータン側に通勤・通学していました。両国の国民はパスポートも必要なく自由に国境を行き来できましたし、多くのブータン人はヒンディー語が分かりますので、治安の問題等少しありましたが、「外国」に暮らすうえでの不便はあまり感じていなかったとのことです。当初の報道ではその数 4,000 人となっていましたが、実際は 6,000 人近くいたようです。彼らをブータン側に避難させる計画が報道されて間もなく、3 月 23 日には陸路国境閉鎖の措置が取られます。また全世界で空港閉鎖や飛行機の運航停止が起きる中、同日には JICA の海外協力隊や一部の専門家の方々もブータンを離れ、日本に向かわれました。津川さんもこのときブータンから帰ってこられました。

25 日にはヨーロッパ帰りの留学生から陽性反応が出て、それがブータン人初の感染事例となりました。ジャイガオンからプンツォリンに避難した人たちは当然住むところがないので、学校の校舎で避難生活を送っていました。そして、プンツォリン郊外の川沿いの平原に、軍を総動員して 1,000 世帯分の仮設住宅を建設するという計画が出され、急ピッチで建設作業が進められました。

最新の国勢調査によると、ブータンの人口にカウントされなかった「国境エリアで働いているデイワーカー」つまりインド人日雇い労働者が 1 万 6,000 人もいます。彼らの多くは毎日ジャイガオン等から国境を越えて働きに来ていましたが、国境閉鎖にともなってこの往来もなくなりました。ただし当時の報道では、「労働者がこっそり国境を越えてブータン側で働いている」ことが問題視されています。

4 月には、外国にいたブータン人が続々と帰国しはじめます。帰国希望者は 5,000 人以上いるとされ、政府は各地にチャーター便を出して彼らの帰国をサポートしました。

写真に写っているオレンジ色のユニフォームを着た一団は、「デスン（De-Suung）」という、国に奉仕するボランティア組織のメンバーです。「デスン」は直訳すると「平和の守護者」という意味で、参加している人たちは「デスップ」と呼ばれています。これは自警団のような組織で、非常時や人手が必要なときにこのオレンジユニフォームを着て出動します。現国王（第 5 代国王ジグメ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク）の提案をもとに 2011 年 2 月に発足し、既に合計 1 万 2,000 人ほどがトレーニングを修了しデスップとして登録済で

した。そのうちの一部はこのコロナ禍の中で消毒液配布や交通規制要員として活躍していましたが、志願者が増え、追加トレーニングがはじまりました。

出所）https://www.facebook.com/PMOBhutan/

4 月には他に、後ほど津川さんからご紹介いただく支援活動や、日本ブータン友好協会等による、ブータンに帰国できない在日ブータン人留学生への生活費サポートがはじまりました。ブータンでは、まったく仕事がなくなった旅行業者、特に観光ガイドたちがグループを作って建設業や農業を始めたといったニュースもありました。また、「ドゥク・トレース（Druk Trace）」という、いわゆるコロナウイルス接触確認アプリの運用がはじまりました。4 月 23 日の段階で、ブータン国内の累計感染者は 7 名で、そのうち回復者は 3 名だと報告されています。

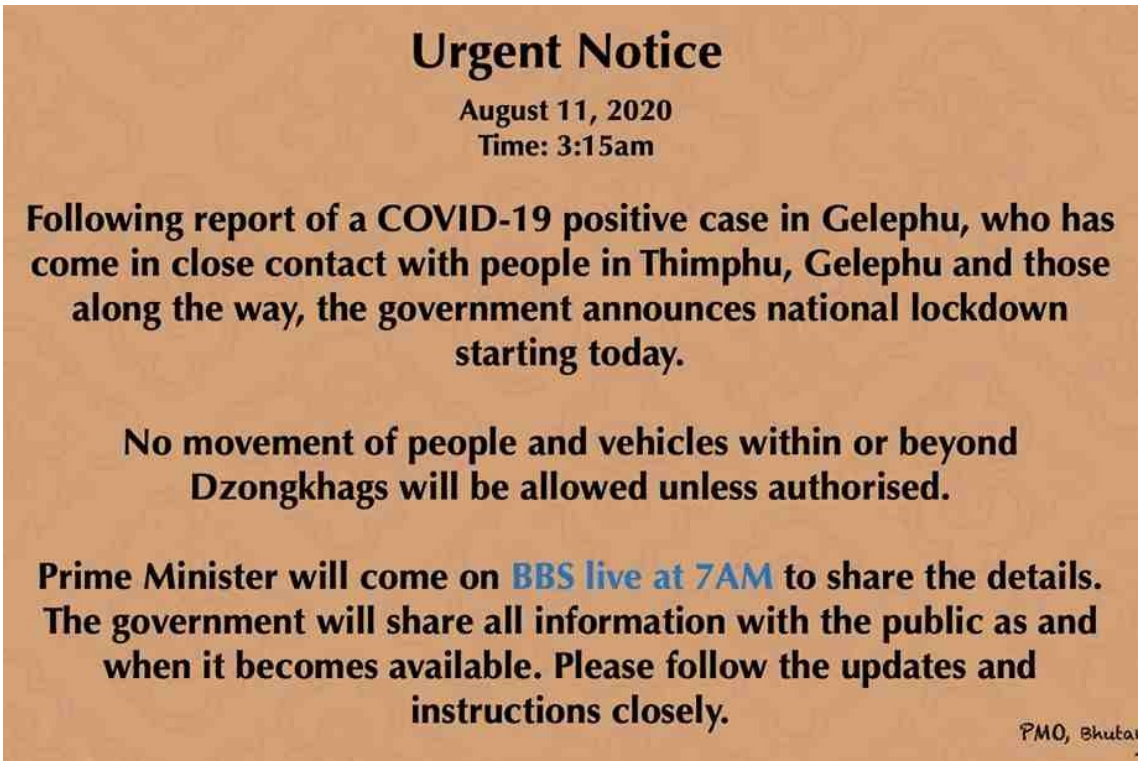
5 月には、中東からの帰国者からコロナ感染者がたくさんではじめました。オーストラリアやアメリカに働きに行っているブータン人の多さについてはよく話題に上がりますが、実は中東にも 7,000 人以上が出稼ぎに行っていて、帰国希望者を乗せるためのチャーター便も、この時期クウェート、バーレーン、アラブ首長国連邦のドバイ等に多く飛んでいました。また、ブータン南部地域から石がバングラデシュに輸出されているのですが、インド＝バングラデシュ国境の町において国境封鎖の影響で数百台のブータンのトラックが立ち往生しているというニュースもありました。同月には、プンツォリン郊外の仮設住宅への入居もはじまりました。

6 月、「国境を越えた愛は検疫で終わる」という記事が新聞に掲載されました。これは国境閉鎖で会えなくなったブータン人男性とインド人女性のカップルに関するもので、どう

しても会いたい気持ちを抑えられなかった女性が、ある日ブータン側に密入国したが捕まって、検疫後にインド側に追い返された…というニュースで、国境を接する国のコロナ禍のニュースにはこんな話もある、というひとつのエピソードです。同月には、2020 年度にはもう小学校は対面授業をやらない、国家統一の修了試験がある 10 学年と 12 学年は 7 月 1 日から対面授業を再開する、という通達が出ました。

7 月 7 日の時点で国内累計感染者は 80 名、回復者は 54 名でした。

そして 8 月 11 日早朝、中東からの帰国者が 3 週間の隔離後、サルパン県ゲレフの自宅に帰ったところで発症したという速報を受け、非常事態宣言が発令されました。全国一律で外出禁止となり、結局このロックダウンはその後 3 週間続きました。ロックダウン中は、食品配達サービスや、餌がなくなってかわいそうな野良犬たちへの給餌プログラム等、オレンジユニフォームのデスップの方々が活躍しました。またロックダウン開始後からプンツォリンでの感染が増えはじめ、特にプンツォリンには厳重な警戒体制が敷かれました。

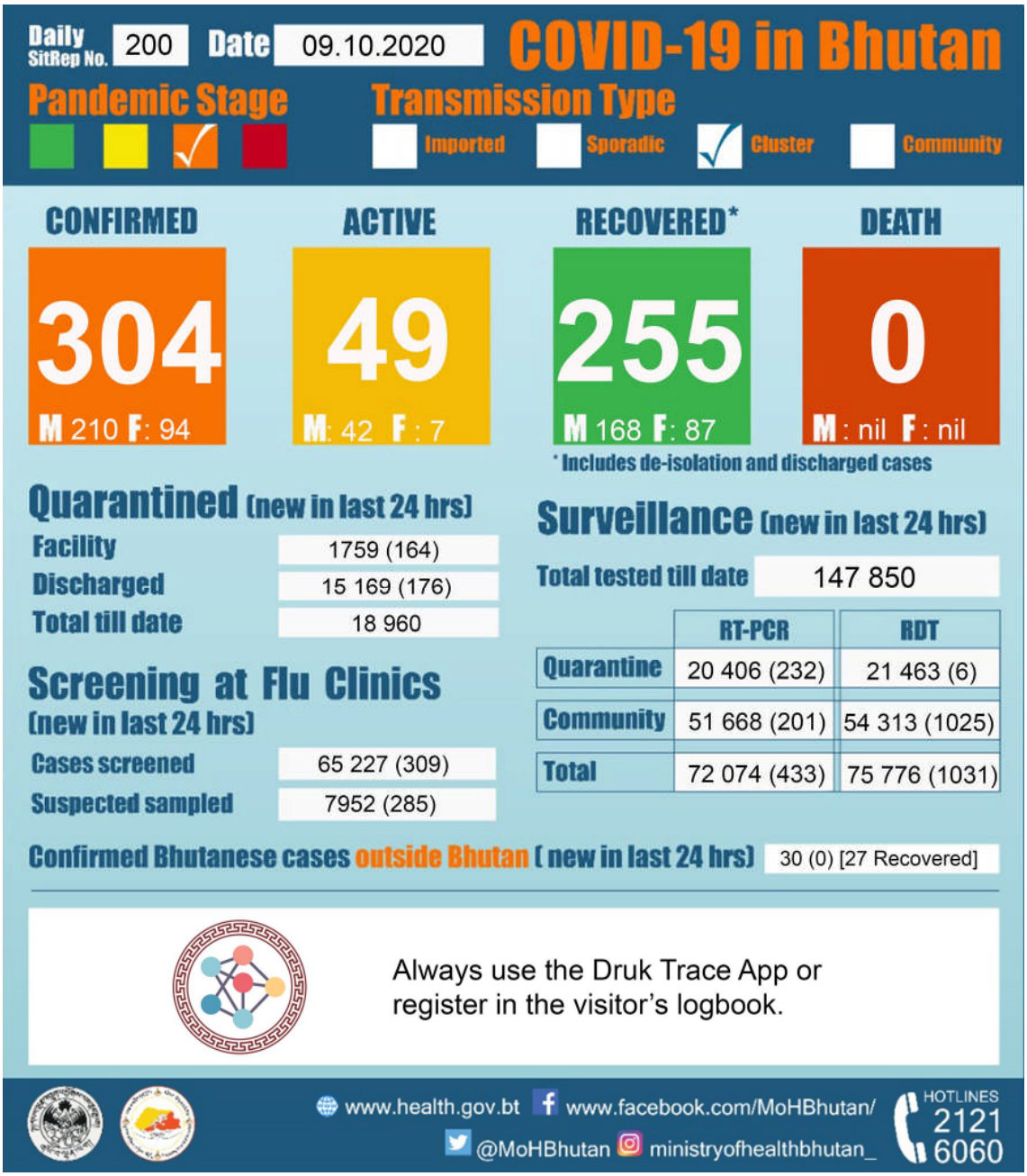


出所）https://www.facebook.com/PMOBhutan/

9 月に入って、多くの地域ではロックダウンが解除されました。プンツォリンは引き続き厳重な体制が続いていて、そこでの対面授業の再開はもう無理だと判断した政府は、「内地」であるプナカ県とワンデュ・ポダン県の各学校に中高生と教員を集団疎開させ、9 月 15 日より対面授業を再開させました。例えばプンツォリン中学校の 9 学年・10 学年の生徒は、今、小学校の対面授業がないので使われていない、プナカのティンレイガン小学校を借りて授業を受けています。来年 2～3 月まではその状況が続く予定、とのことです。

昨日（10 月 9 日）の時点で、ブータンのコロナ感染者は累計 304 人、回復者は 255 人で

す。幸い死者は出ていません。



出所）http://www.moh.gov.bt/national-situational-update-on-covid-19-data-as-of-8th-october-2020/

以上、駆け足で振り返らせていただきました。それでは３番目のセッションに入ります。津川さんにお話を伺いながら進めていきたいと思います。

③　ゲストにお話を伺いつつ、深める

平山：最初に、越境するブータン人の状況に関してです。例えば、外国人観光客受入停止に伴って観光ガイドの方々は仕事がなくなってしまいました。国外から帰国した方々もコ

ロナ禍の中で仕事がなく、経済的に苦しい状況が続いていると予想されます。彼らに対する政府のサポート、例えば就労支援や一時給付金等はあるのでしょうか。

津川：質問に答える前にひとつ補足させていただきます。今、平山さんの説明の中で、結構多くのブータンの若い人たちが国外に出ているという話がありました。ブータンは小さな国で人口が 70 万人弱ですが、教育にとても力を入れていて、高校・大学レベルの教育を修了する人が非常に多くなってきています。ただし小さな国で産業も少ないので、なかなかブータン国内でそういう人たちを雇用しきれていません。そのため、外に出る若者が増えています。日本にもたくさん来ていますが、中東、あるいはオーストラリア、アメリカに出る人たちが多くいます。

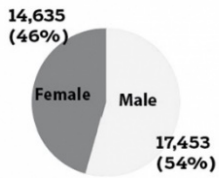
そしてこの新型コロナウイルス禍の状況で、ブータン政府は彼らを国内に呼び戻しています。詳しい数字は分かりませんが、相当な数の人たちが急にブータンに帰ってきていますので、彼らをどのように政府として処遇するのか、あるいは今の質問にありました、ブータンの主な産業のひとつである観光業や建設業に携わっていて仕事がなくなってしまった人たちに対して、政府はどのような対策を講じられるのかということが大きな問題になっています。

日本では政府が特別定額給付金や持続化給付金の配布を実施しましたが、ブータンにおいても政府がいろいろなことを行っています。特に大きなものは、「キドゥ（Kidu）」という互助制度です。これは国王のリーダーシップの下でなされているプログラムですが、今回のコロナ騒ぎだけではなく、平時でも、例えば火事になって家が焼けた、あるいは自然災害で相当損害が出た…というような方々には、すぐに対応して支援をする制度があります。この制度を使って困っている人たちに対して多少なりとも補償金を支払ったり、あるいは企業に対してもゼロ金利で支援をしたり、あるいは返済を猶予するというような政策をとっているようです。

最低限必要な物資は入ってきていると思いますが、国境を封鎖してインドから入ってくる物資が減っています。特に農産物はブータンでも頑張れば作れるものですので、例えば今仕事がない観光業の人たちに農業に携わってもらい、自国で対応しようとしています。このようなことも、国の政策としてはじめているようです。

平山：ありがとうございます。この表は、6 月の時点で、男女別及び職業別に何人がその救援キドゥを申請したかを示すものです。3 万 2,088 人が申請していますが、おおまかな所得審査のようなものがあり、そのうちの 7 割強が受給できたようです。支給額は、4～7 月の第 1 フレーズでは月 1 万 2,000 ヌルタム（約 1 万 8,000 円）もしくは月 8,000 ヌルタム（約 1 万 2,000 円）、7～10 月の第 2 フレーズでは月 1 万ヌルタム（約 1 万 5,000 円）もしくは月 7,000 ヌルタム（約 1 万 500 円）とのことです。

男性 1 万 7,453 人（54%）、女性 1 万 4,635 人（46%）となっていて、やはり「Tourism」（観光業）のかたが圧倒的に多く、1 万 1,000 人以上が申請しています。他に「Transport & Communication」（輸送業）、「Retail」（小売業）、「Restaurant & Food Services」（レストラン・食品サービス業）の人が多く申請していて、その 2 つ下にある「Returnee」が外国から帰ってきた方々を指しています。



32,088
Kidu applicants

Tourism	11045
Transport & Communication	4705
Retail	3934
Restaurant & Food Services	2961
Personal & Recreational Services	2223
Returnee	1626
Professional & Consultancy Services	1480
Construction	1023
Unemployed & Un-paid	796
Education & Health	751
Manufacturing	745
Mining	311
Sector not specified	291
Agriculture	164
Public / Corporate	17
Finance & Real-estate	15
Electricity	1
Total	**32088**

出所）https://kuenselonline.com/druk-gyalpos-relief-kidu-benefits-22963-people/

津川：今、ブータンには 20 の県がありますが、各県にある地方政府の中に必ずキドゥ・オフィサーという、キドゥを専門に扱う役人がいます。県内の困っている人、あるいは何か事故や災害が起きたときにどれくらい支援をしたら良いのかというようなことも、そのキドゥ・オフィサーを通して、あるいは県の下にある地区（日本の村役場にあたる）のオフィサーを通して、かなり詳しく調査したうえで支援をしています。国王のリーダーシップの下で行われている事業ですが、このように下のほう（直接住民に係わる役人）から提案して、そしてそれに対して支援をするというような、非常にきめ細かい、手厚い支援を実施しています。よく新聞に出るのは、土地なし農民に土地を分け与えて自立できるようにサポートする…といったもので、非常に良い、政府の大きな計画の中ではできないような支援を実施しています。

平山：それでは次に移りたいと思います。ジャイガオンからプンツォリンへと避難した人々の多くは、仮設住宅での生活を続けています。プンツォリンはコロナ感染者も多数報告され緊張が続いているようですが、彼らの近況はどのような感じでしょうか。

津川：今、政府はプンツォリンに住んでいるすべての市民に対して PCR 検査を実施しているようです。また先ほどスライドにもありましたように、5,000 人近い人たちが隣のインド

の町ジャイガオンから移動してきました。世帯数にして 2,000 世帯くらいだと聞いておりますが、完成した仮設住宅は 1,000 世帯分ということで、すべての人が入居できたわけではありません。知り合いのところに一緒に住んでいるとか、そういう状況にある方々も多いと聞いています。また、プンツォリンはインドとの国境の町ですので標高が 300 メートルくらいしかありません。気温が高い、そして雨季は雨量も多いということで、6 月から 9 月いっぱいは暑さと湿気で、厳しい環境の中で過ごされたと思います。

我々日本人からすると国境というのはなかなかピンときませんが、プンツォリンとジャイガオンというのは隣なりどうしに接している町で、以前は小さな溝が国境でした。塀もないし、自由に溝を跳び越えれば行き来できるような状況でした。先ほど平山さんからも話がありました通り、インドとブータンという違う国ですけど、通貨もブータン・ヌルタムを使ったりインド・ルピーを使ったり、あるいはお互い言葉の壁もないので、ひとつの大きな町のような感じで過ごしていたわけです。

現在は、この国境には高い塀が作られました。ブータン人とインド人は行き来していますが、我々外国人は自由には行き来できません。行ってみないとジャイガオンとプンツォリンの違いやその国境はピンとこないかもしれませんが、ブータン人にしてもインド人にしても、そこに住んでいる人たちにとっては、国の違いはほとんど感じない状況だろうと思います。

出所）https://www.facebook.com/KingJigmeKhesar/

平山：ありがとうございます。仮設住宅は、軍が本当に頑張って、突貫工事で作られました。津川さんが指摘された通りプンツォリンは暑い場所なので、非常に大変な作業であっ

たと思います。右上の写真は、5 月に行われた仮設住宅の入居開始時のセレモニーで首相が挨拶をされているところです。左下の写真は、仮設住宅とその入居者たちです。1 世帯分に 2 部屋あり、またキッチンとトイレはそれぞれの住宅にあるようです。この黄緑色の制服を着ている女の子たちはプンツォリン中学校の生徒たちで、彼らは皆、今はプナカ県で勉強を続けています。右下の写真に写っているのは教員の皆さんですが、彼らも一緒に移動して授業を行っています。

次に、コロナ禍での社会・人々の変化に関してです。コロナの状況下で、インドから出稼ぎに来るインド人の往来がなくなりました。先ほども少し触れましたが、「国境エリアで働いているインド人の日雇い労働者」だけでも 1 万 6,000 人いましたし、それ以外にも多くの労働者が国境閉鎖前にインドに帰国しました。このインド人労働者がいない、ということによるブータン社会の変化はあるのでしょうか。

津川：インドから来ている労働者はほとんどが道路工事であったり建物の工事であったり、建設現場で働いている人でした。ただしプンツォリンの場合は、ホテルやレストラン等でも働いている人がいました。

国境封鎖に伴って物の行き来が自由にできなくなると、例えば建設業であれば、セメントや鉄筋等、建設業に必要不可欠な資材がどうしても滞ってしまいます。それらが入ってこないことには実際の工事ができないので、物が入って来ないがために、恐らく土木工事・建設工事はストップしたと思います。さらに労働者が少なくなった、もしくは入って来なくなったことによって、すべてが止まってしまうという状況なので、ブータン側としてはもちろん打撃ですけれども、プンツォリンの町全体から見れば、もう致し方ないことだということだったろうと思います。

さらに、国境の辺りはコロナで危険だということで、恐らく買い物にプンツォリンに行く人も本当に限られていたでしょうから、ホテルに滞在する人もほとんどいないような状況だったのではなかろうかと思います。8 月にロックダウンが始まってからはもう、県を越して移動することもできなくなったわけですので、プンツォリンは非常に静かな、町にもあまり人がいないような状況だったろうと想像されます。学校もストップしていますので、日々の生活に本当に必要なものだけを買うために外に出る…というような状況だったのではないかと思います。

平山：ありがとうございます。「ブータン建設プロジェクト（Build Bhutan Project: BBP）」について触れさせてください。「インド人の労働者に頼らずブータン人で建設業を進めていくべきだ」という議論は政府の中で何度も何度も生まれてきていましたけれども、今回、特にコロナ禍の中でインドからの労働者がいなくなり、改めて大きく取り上げられました。実際に自分たちで作っていこう、動いていこうという取り組みのひとつが、このブータン建設プロジェクトというものです。

このプロジェクトはブータン人 7,000 人を 2 年間雇用して、建設分野でのトレーニングを実施するという、すごく大々的な計画です。これまでよく、ブータン人はプライドが高くてブルーワーカーの仕事をしたがらない、オフィスでホワイトワーカーの仕事をしたい、仕事を選び過ぎるために失業問題が解消されない…等と言われてきましたが、それではい

けない！ということで始まろうとしているのがこのプロジェクトです。8 月の時点で 216 人を直接雇用して、トレーニングをしながら活動しているというニュースがありました。今はもう少し増えていると思いますが、このような動きも生まれています。

津川：200 人の若者が、例えば民間の建設会社に入って建設業に携わるようになったら、ブータンにとっては非常に大きなインパクトだろうと思います。ブータン人が技術系の仕事に向いていないとか、それができないということは決してないわけで、もちろん建設に関する技術を取得して経験を積めば、いつでもインド人に取って代われるとは思います。ただ、これまで長年、そうした仕事はやはりインドからの出稼ぎの人たちに頼ってきていて、日当・賃金が安く抑えられていました。そういう状況でそれと同じような賃金しかもらえないのであれば、なかなかブータンの若者は進んでそちらの仕事は希望しないでしょう。しかも大卒の若者は、どちらかというと現場型よりもホワイトカラーの分野の勉強をしてきた人たちが多いでしょうから、一気にインドの人たちに取って代わるということは難しいと思います。

ただし、こういうコロナ禍の状況は、やはり自分たちで、何とかブータン人でやっていかないといけないという、考えかたを変えるきっかけになっているのではないかなと思います。考えかただけ変えてももちろん動きませんので、最低賃金等、労働者に対する支援を政府が行っていかないと、なかなか難しいだろうと思います。しかし、これはやっていかないといけないことですし、また技術系の大学が国内に 2 つありますので、そこを卒業した人たちがどんどんこういう職業に就いて、良い模範となり、また若い人たちがそれを見習いながら続いてきてくれるのではないかというふうに思います。コロナの世界的流行は非常に不幸なことですけど、ブータンの人たちの気持ちがこれによって少し、変わっていくのは良いことだと思います。

平山：コロナ禍における人々の価値観や意識の変化にはどのようなものがあるのでしょうか。例えば「農業への回帰」であったり、「助け合いの精神の再構築」であったり、「ボランティア・マインドの醸成」のようなものはあるのでしょうか。

津川：ブータンは農業国ですので、農業人口の増加は非常に重要なことだと思います。ブータンでも地方から都市部に多くの若者が流れるという現象が起きており、地方の町や村で若者が少なくなってきています。それによっていろいろな問題が出てきていますが、ひとつはやはり農業です。若い人たちが離れることによって農業が廃れていくという現象が起きていますので、この機会にもう一回、農産物の食料自給率を上げたいと政府も考えています。農産物を自分たちで作って自分たちで食べようという意識は、以前にも増して強くなったと思います。具体的には、例えばトウガラシ等です。トウガラシとトマトとタマネギは、すべての県で作る、さらに各県の特徴を生かして、野菜を指定して栽培促進を進めるという話を聞いています。

コロナ禍の中で、政府は農業にも力を入れて支援をしています。やはり都市部では仕事がなくて困っている若者が多く、こうした支援を通して、都市部の若者たちも地方に移動するのではないかと期待されています。まだ実際にそのような流れが起きてるいのかどう

かは分かりませんが、徐々にこれからそういうことが進むのではないかと思います。

あと、1970～1980 年代は非常に強かった地域のコミュニティの繋がり（地域での助け合いや共同作業）が、経済が発展するにつれて徐々に薄れてきていました。このコロナの影響もあって、情報共有だとか、あるいは助け合いだとか、いろいろな面でコミュニティの絆が強くなってきているという話は聞いています。そういう繋がりの大事さ、重要さを再認識する機会になっているのではなかろうかと思います。

ティンプーでも、アパートの隣なり近所の人たちで食物を分け合ったり、野菜をシェアしたり…というようなことも起きていると聞いています。ブータンの古きよき慣習が、またここにきて出てきたのではないでしょうか。私がいた 2 年前は、アパートの住民は隣りの人が何をしているのかも分からないというような状況がありましたが、また近所付き合いを大事にしようというふうに変わってきているようです。これはある意味良いことであるし、必要なことだというふうに思います。

平山：次に、ブータンでのボランティア活動についてお聞きしたいと思います。まずブータン人によるブータンでのボランティア活動、というと、何度も出てきたオレンジユニフォームのデスップの活動が最初に思いつきます。デスップたちの活動はコロナ禍の状況でうまく機能していると言って良いでしょうか。

津川：スライドにもありましたように、この人たちは他に本職があって、何かのイベントがあるとか、自然災害が起きたとか、あるいは今回のようなコロナ禍の中での、そういう状況のときに呼び集められて活動するという人たちですので、まさにボランティアと言って良いと思います。国が支援してトレーニングして、そして公務員でも民間企業の人でもすべて平等にこうした活動を行っているのは、ブータンならでは、ブータンだからこそできるような組織・活動だと思います。

平山：確かにそうですね。また外国人によるブータンでのボランティア活動、というと、大きなものでは国連ボランティア、カナダの教師派遣等の他に、JICA 海外協力隊が思いつきます。JICA ボランティアはブータンでは（ブータンでも）知名度も高く注目される存在だと思いますが、今回のコロナ禍の中、任期途中での日本への帰国、というかたちになりました。これはブータンに限った話ではないですが、JICA ボランティアの活動再開の見通しはどのような感じでしょうか。

津川：コロナの感染状況によると思いますし、もちろんすべての人が早く再開してほしいと願っていると思いますけど、国の感染状況が落ち着いて、そして飛行機も安心して飛べるような状況になれば、できるだけ早く再開するということになろうかと思います。今の時点ではまだ何とも言えず、JICA のほうも様子を見ている状況ではないでしょうか。ただ、日本に帰ってきて待機しているボランティアの方々の中には、休職している人もいるだろうし、あるいは長く再開を待てないという人もいらっしゃるでしょうから、そこはいつまでも引き止めることもできません。「もうこれで辞めます」という人も中にはいるだろうし、あるいは「再開するまで待ちます」という人もいらっしゃるでしょうから、そこはケース・

バイ・ケースで対応するということになると思います。

平山：ありがとうございます。今回、ブータン関係者の中で「何か自分たちにできることはないか」という話がなされはじめたころ、最初にアクションを起こされたのが津川さんだと思います。ご自身が音頭をとられた支援活動に関してご紹介いただきたく思いますが、よろしいでしょうか。

津川：先ほどから話に出ているプンツォリンとジャイガオンの話で、ジャイガオンからプンツォリンに移動してきたブータン人約 5,000 名、2,000 家族の人たちがプンツォリンで生活するようになったと。ただ、仮設住宅ですし、仕事もなかなかない状況ですので、その人たちに対して協力したいということで始めました。

物資を送るということも検討しましたが、何を送ったら良いか、どうやって送ったら良いかという多くの問題がありますので、募金活動をして、その集まったお金で必要なものを調達してもらうというかたちを採りました。募金期間は 1 ヵ月半くらいの期間でしたけれども、141 名の方々から 120 万円以上の募金が集まりました。避難してきた人たちの、特に幼児を対象にした幼稚園を作るというのがプンツォリン市役所の考えでしたので、その幼稚園の遊具や必要な備品を、この 120 万円を使って揃えてもらうことになりました。

成功した要因としては、すごく多くの方々が協力してくださったということと、プンツォリン市役所と何回も何回も話をして、どういうものを支援したら良いか、どういうものが必要かということを調整してもらったことが大きいです。その仲介者、今回は JICA ブータン事務所にお願いしましたが、それがないと何もできませんでした。ですから、募金活動は良いにしても、中間でいろいろやっていただくかたが必ず必要ですし、それがないと何も動かないということが分かりました。

募金活動というのは、やはりいくら集まるか分からないものです。何を買うかは募金が集まった最後にはじめて協議できるわけですので、なかなか不確かな要素が多いです。あと、寄付してくださった方々にも説明責任があります。141 名の方々に説明しないといけないので、そういうことも大変だなということを感じました。私の力ではないですけれども、皆さまに協力していただいて、良い活動ができたというふうに思っています。ありがとうございました。

平山：最後に、新しいボランティアのかたちに関してです。外国人（日本人／外の人間）がブータンの人々（特に今回のテーマの「越境するブータン人」）に対してできる支援活動にはどのようなものがあるでしょうか。お考えをお聞かせいただければと思います。

津川：特に今回は日本も非常に苦しい状況の中でブータンに支援するということですので、なかなかお願いしにくかったというのはあります。もしブータンで地震があって、日本は何もなくて、その地震の被害を受けた人たちに対して支援するというのであればもっと多くの方々にお話しできたかと思いますが、同じような状況で、大変な中でやるというのは非常に難しいなと思いました。

ボランティアということはあまり難しく考えずに、自分で心地良いこと、気持ちの良い

こと、あるいはそういうことをやりたいというような気持ちではじめれば良いのではないかと思います。ただ、ボランティアだから何をやっても良いとか、あるいは集まった募金は勝手に使って良いということでは決してないです。やはりボランティアをするといっても、責任のある役割、責任のある活動をしないといけないわけですので、そこのところをはっきり意識してやるべきだと思います。自己責任の下で、自分の意思決定の下で、自分が決めて自分がやるということですけど、何をやっても良いかといったら決してそうではなくて、やはり必要とされていること、あるいは要求されたことに対してきちっと応えるべきです。ですから、ボランティアの大事なことは、何をやるか明確な役割を決めることだと思います。もうひとつは、中間に立つ人、コーディネーター、あるいは中間の団体、これは行政でも良いですが、そういう方々がどうしても必要になってきますので、そことうまく連絡を取ってやるということになるかと思います。

このように何か必要なことがあるときにアクションを起こすというのもひとつのボランティアの形かもしれませんが、私が常日頃思っているのは、寄付金等を常日頃、蓄えておくことです。そして何か事があれば、そこから支援するような体制が良いのではないかなと思っています。そのひとつとして、私は前から「おにぎりプロジェクト」というものを考えています。これは仮の名前ですが、例えば 1 ヵ月に 500 円貯金してくれると、1 年間で 6,000 円になります。もしそういう人が 100 人いてくれれば、1 年間に 60 万円集まります。あるいは 1,000 人いたら 600 万円集まります。この 1 ヵ月に 500 円貯金するというのは、1 ヵ月のうちに昼食を 1 個のおにぎりで我慢するということです。

ちょっとだけ自分もひもじい思いをする、というところが大事なところです。自分もおにぎり 1 個で我慢するという、そこを困っている人たちとの共有事項として、自分も少しその人たちに寄り添う。その人たちの気持ちになるということで、1 ヵ月に昼食代 500 円を貯金して、そして 1 年間に 6,000 円を貯める。賛同する人が 1,000 人いたら 1 年間に 600 万円が集まるわけなので、これは非常に大きな額です。これでいろいろなところで困っている、あるいは必要とされているケースに協力できます。これが今、私が考えている新しいボランティアのかたちです。ただ 500 円を出してくださいというのではなく、少しひもじい思いをしたうえでの 500 円ということが大事なのだろうと思います。

あと、今日参加されているかたの中で 1 人、子どもたちのボランティア体験をコーディネートしているかたがいらっしゃいますけれども、私はやはり子どもたちになにがしかの役割をきちっと見つけて与えることが、ボランティアをうまくできるかどうかに直結すると思います。「何でも良いよ」ということでは、決してうまくいかないのではないかなと思いました。

平山：ありがとうございます。たくさん重要なヒントを挙げてくださったと思います。それでは残りの時間は、皆さまからいただいた質問をもとに進めたいと思います。

1 つ目です。「ブータンの日本大使館は常駐ではなく、インド大使館が兼務となっているということで、現地のボランティア支援等の点に不都合はないのでしょうか。今回のコロナ禍では、たびレジ等、大使館発信情報が極めて乏しい印象がありますが…。」いかがでしょう。現地に日本の大使館がないことでの不都合で、難しい点に関してのご質問です。

津川：いろいろな面で不便はあります。確かに、例えばパスポートを更新するときはインドのデリーまで行かないといけません。在インド日本大使館が在ブータン日本大使館を兼務していますので、外交上はそこまで大きな問題はありません。ブータン国内で日本が行っている技術協力の調印や式典で、大使、あるいは大使館のどなたかが出席しないといけないときはデリーからも来られますし、ティンプーに JICA ブータン事務所がありますので、そこの所長が代理で日本政府を代表するというようなこともあります。もちろん大使館があるに越したことはないと思いますけれども、なかなかすぐにはできないということで、今はこのように兼轄でやっていただいているということです。

平山：ありがとうございます。2 つ目の質問も読み上げさせていただきます。「コロナ禍でも、感染を躊躇せずにデスンの志願者は集まっているのでしょうか。デスンを組織化しているのは地方政府ですか。」このご質問がありました。

津川：地方政府ではなくて、ブータン政府ですね。

平山：中央政府ということですね。

津川：中央政府です。私はそこの応募の仕組みが、本当のところはどのようになっているか分からないのですが、例えば役所とか会社に多少、割り当てのようなものがあるのかもしれません。もうすでに何万人という方が登録されてるわけですが、これからさらに追加でトレーニングを行っていくようです。やはり国家事業、特に国王の肝煎りのプロジェクトですので、私の知っている限りでは、進んで参加しているということだろうと思います。

平山：学校教育の影響も強いと思いますが、ブータンの方々の愛国心、国を思う気持ちはかなり強いです。コロナ禍の中で改めてそれを感じるひとつがこのデスンに関するいろいろなニュースでした。実際、王族や前首相等、一般の方々に限らず、本当に多くの年齢・性別・立場を問わない方々がトレーニングに参加して活動しようとしています。これは日本とは明確に異なる点なのではないかと思いますが、そういう流れが確かに感じられました。

今、もうひとつ質問をいただきました。「キドゥに支援を申し込めるのは国籍保有者だけでしょうか。また、キドゥの財源は？国王主導ということですが。」とのことです。津川さん、いかがでしょうか。

津川：そこのところははっきり分かりませんけれども、国家予算からもちろん出ていると思います。あと、キドゥを受ける人はブータン人には限らないと思います。ブータンに滞在している外国人でも、もし大変なことが起きれば間違いなく支援していただけるというふうに思います。

平山：王室のお金もかなり投入されるといると聞いています。今回のコロナ禍での救援キドゥに投入された額は、4 月からの半年で 12 億ヌルタム（約 18 億円）でした。詳細を調

べ切れていませんが、中東をはじめとした各国政府や有力者の寄付、また外国で暮らすブータン人コミュニティが取りまとめた寄付等もその財源となっているようです。

もうひとつご質問をいただきました。これを最後の質問とさせていただきたく思います。「ブータンでは、コロナ感染者に対する嫌がらせや偏見、差別等は起きていないのでしょうか。」津川さん、いかがでしょう。

津川：表向きは起きていませんが、実際はあるでしょうね。最初の感染者が旅行者だったということで、ひょっとしたらブータンの人たちはほっとしているかもしれません。皆さんやはり自分は感染したくないですし、噂が広まるのが早いので。

私は今回 2 月末から 3 月 23 日までブータンにいたのですが、最初の感染者が出た 3 月初め、私はティンプーから車で 6 時間ほどのトンサというところにいました。トンサでもお寺のお坊さんは皆マスクをしていましたし、レストランの人たちもマスクをしていました。毎日のニュースでも報道されていましたし、SNS や電話を使った情報共有もなされていました。ブータンでも情報化が進み、今はもう首都で起きたことは瞬時に全国に伝わるというような状況です。やはり人口の少ない小さな国ですので、まとまりやすいですし、政府の意向がすべての人たちに伝わりやすいです。そのため、感染状況はかなり小規模な段階で食い止められています。それから、やはり首相、外務大臣、そして保健大臣が医療関係者ですので、彼らを中心に政府はものすごく力を入れてこの問題に取り組んでいるというふうに思います。

平山：ありがとうございます。本日は、「越境するブータン人」というテーマで、コロナ禍のブータン社会を取り巻く状況を見つめ、ボランティア活動について模索してみました。国境を巡る問題、移動を巡る問題は、ブータンを飛び越えいろいろなところにリンクしています。例えば早稲田大学にも、コロナ禍の中で日本に来れていない留学生がたくさんいます。留学中だった多くの学生がはやめに切り上げて帰ってきましたし、留学予定がなくなってしまった学生も大勢います。皆さまの身近にいらっしゃる外国にルーツをもつご友人であったり、外国で働かれているかたであったり、国際交流の現場であったり、例えばコンビニで働いている日本語学校の学生…にだって繋がっていると思います。本オンラインセミナーが、何か考え直す、動き出すきっかけになりましたら幸いです。また、ひとつでも皆さまに得るものがありましたら、嬉しく思います。

改めて、ゲストの津川さんに御礼申し上げたいと思います。また、お休みの中大切な時間を使ってご参加くださった皆さまもありがとうございました。来週、再来週とオンラインセミナーは続きますので、よろしければそちらにもぜひご参加ください。それでは、WAVOC 主催オンラインセミナー第 2 回を終わらせていただきます。ありがとうございました。

当サイトの内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を禁じます。